ドナルド・キーンと戦後日本

――日本文学研究とアメリカの影――

笹沼俊暁

一　はじめに

アメリカ合衆国の日本文学研究者・ドナルド・キーン（一九二二年～）は、大作『日本文学の歴史』十八巻をはじめ、古典から近・現代文学にいたるまでの研究や翻訳・紹介で、一般的にも広く知られている。だが、キーンの文学論の内実がどのようなものであるかについて、歴史的に相対化して論じる試みは、いまだ殆どない。キーンの日本文学論は、現代の研究の先端からすれば、素朴で時代遅れのもののように見える。しかし、それはもともと各国の一般読者への啓蒙として書かれ、サイデンステッカーの著作とともに戦後の海外における日本文学のナショナルなイメージづくりに多大な貢献をしてきた。キーンの著作は、戦後における「日本文学」というものに対する観念の有力な一部分を形作ってきたのである。そしてそこには、第二次世界大戦後の日米関係の政治性もまた反映されており、彼の著作は、当人の意図とは別にその一翼をになう働きをしてきたのでないだろうか。具体的にいえば、キーンは、戦後の国文学にアメリカ的な民主主義の価値観を持ち込んだのである。彼は、本人が意識していたかどうかは別として、戦後の冷戦体制のもとで、アメリカ主導の国際的枠組みのなかで日本文学の民族的な表象を描き出す役割を果たしてきたと考えられる。本稿では、個々の文学作品や作家、文学潮流についてのキーンの見解の是非を「研究史」的に問うのではなく、彼の日本文学についての言説を、戦後日本における思想史的な文脈のなかで論ずる。[1]

二　戦後日本の国文学とドナルド・キーン

ドナルド・キーンは、一九五三年に来日し京都大学に留学した。この頃に彼は、日本のメディアに論文や評論、エッセイを発表し、日本での論壇デビューを果たしている。『中央公論』での連載で当時のキーンは、「神秘的な東洋」「芸術の国」「軍国主義の国」「平和主義の国」といった概括的なステレオタイプでとらえることに反対すると同時に、日本社会における「外人」に対する思い込みと先入観に対する抗議をおこなっていた。そこには、日本は特別な国であるという排他的な意識が介在しているというのが彼の考え方だった。それは、戦時中の国粋主義に対する嫌悪感と地続きのものだった。たとえば、彼は、戦前に書かれた佐佐木信綱『上代文学史』（東京堂、一九三五年）の新訂版（一九四八年）に対して激しい批判をあびせていた。佐佐木の著作は、戦後の改定ののちもあいかわらず「日本古代に対する無批判な崇敬の念や西欧の読者の共鳴し得ない愛国精神に彩られている[32]」という。たとえば、神武天皇の作といわれる歌が実際にそうなのか全く疑問を提出せず、また『古事記』のとるにたらない小詩を大げさに褒めちぎっているというのである。

キーンの批判は、実際に佐佐木信綱『上代文学史』を開いてみると、確かに当たっている部分が随所にみられる。例えば、佐佐木は、『古事記』について、「とにかくわが国は、かやうに国土形成の最初からして、これらの神々の造化、支配によるものであつて、それ以来悠久たる年月を経て、我が皇室はその血筋を引きいますと伝へるのである[33]」とするなどしている。佐佐木の著作に、戦前・戦中の皇国史観と国粋主義が根強く底流していることは確かといえる。キーンはそこに、日本と日本文学を根拠もなく特別のものとみなす自民族中心主義の匂いをかぎとっていたのである。のちに彼は、繰返しこのエピソードを述べて、西洋文学を背景とした外国人の立場から、比較の視点を取り入れて、日本人の「独善的な自己讃美」をこえる文学史の必要性を訴えることになる。いわば、戦後の国文学界にリベラリズムの思想性をアメリカから持ち込むかたちで、彼は登場したのである。

では、キーンが登場した戦後まもない一九五〇年代の、日本における国文学あるいは日本文学の研究は、どのような状況にあったのだろうか。もともと、「国文学」および「日本文学」とは、近代日本の国民国家形成のうえで大きな役割を担うものとして創出された側面が大きい。そして、国文学は、民族的な自己同一性と特殊性を確保するために、しばしば「普遍性」あるいは「世界性」の問題と向かい合う形で展開していた。たとえば、一八九〇年に刊行された日本で最初の

文学史である三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』は、テーヌの文学史の手法に依拠しつつ、それぞれの国における「其固有の特質」を具えた文学を「国文学」と呼ぶとする一方で、「人をして、高尚、優美、又、純潔なる、精神上の快楽を、感ぜしむる間に、道徳、宗教、真理、及び美術上の観念を起さしめ」るようなものは、「何国の文学にも適用して、不可なきのみならず、特にかの所謂世界文学（又は万国文学）なるものに適合」すると述べていた。近代の国文学は、「世界文学」を対概念として出発していた。日本文学史は、そのナショナルな自己同一性と特殊性を、西欧の文学概念の普遍性との対比をとおして形成し、主張したのである。

普遍性と特殊性をめぐるこうした文学史の枠組は、その後に様々に形をかえて継続する。大正期の国際協調主義の時代には、土居光知『文学序説』（岩波書店、一九二七年）のように、西欧の文学を普遍性の基準として日本文学の特殊性を否定的にとらえるかたちで実体化させる言説があった。昭和期にはいると、その反発として日本主義的な時代風潮のもと日本文芸の独自性を肯定的に表象し、さらには日本の文芸様式こそが西欧にもまして普遍的であるとする岡崎義恵の『日本文芸学の様式』（岩波書店、一九三八年）などがあらわれる。普遍性の言説は、国文学の民族的な自己同一性を強化し時には拡大すらさせる言説として、繰り返し再生産され続けたのである。[5] そして、日本文学の特殊性と普遍性の議論は、敗戦後、戦前の体制が否定された後も、戦後民主主義の思想性の下で繰り返された。

戦後まもなく、「近代主義」の思想潮流が力を持ったことはよく知られている。日本が軍国主義と国家主義によって戦争への道を歩んだ原因を、日本社会に残存する前近代的・封建的な特殊日本的要素に求め、批判したのである。佐藤泉の近年の研究によれば、当時の高等学校の国語教科書では、「文学」に大きな比重がおかれており、「自我」や「個人」、「近代精神」の覚醒の歴史を追う近代主義的な文学史の枠組が用いられていた。そして、当時の文学史の多くが、戦時期の国家主義・国粋主義を批判する目論見から、近代的な個性や自我をうけとめる器として、「普遍性」「世界文学」の重要性を説いたという。[6]

世界性・普遍性をめぐる言説は、アカデミズムや批評界でも、当時多く提出されていた。そしてその多くが、民族的な特殊性・固有性を前提としていたことに留意したい。津田左右吉は、一九四七年一月に雑誌『文学』に論文「世界文学としてのニホン文学—文学の比較研究について—」を寄稿し、文学の国際的な比較研究の必要性を訴えていた。しかしその一方で、「現代文化は一つの世界文化であるにしても、それには民族による特殊性が含まれてゐる。言語、宗教、思想、

感情の動きかた、ものごとの見かた考へかた、などはもとよりのこと、日常の生活のあらゆる面にそれがあり、さうしてそれが文学に表現されてゐる[7]」、と述べていた。また、小田切秀雄は、「世界文芸といえば、重慶、昆明と延安との二つの中国からの新しい文学の生成、フランスでのルイ・アラゴンやアンドレ・マルロオやジャン・ゲエノ等の革命的インテリゲンチャ文学の発達、戦後のソビエト文学の新しい動き、等々がなまなましい力でわたしたちの胸に伝わりはじめている」としながらも、「これらの文学がそれぞれの国の特殊性に深く根ざしながらいずれも新しい民主主義的な傾向をもって出てきている[8]」、としていた。マルクス主義的な普遍性を世界文芸の基準としながら、国別の特殊性を前提していたのである。こうした特殊性をめぐる認識は、近代主義への反発としてあらわれる竹内好の国民文学論や、西郷信綱や石母田正、永積安明ら左派系の立場からの民族主義の国文学論と、対をなすものといえるだろう。戦後の世界文学や近代主義の言説は、国民文学論の民族主義と思考の枠組を共有していたのである。

ドナルド・キーンが一九五〇年代に展開した日本人の閉鎖性への批判は、戦後まもなくの日本の言論界や国語教科書において、文学の普遍性・世界性の問題がしばしば提出されていたことと無縁ではないだろう。キーンの言説は、それを、民主主義をもちこむアメリカ合衆国の側から補完する機能を担ったといえる。「占領国」のアメリカ人をも納得させられる、いわば普遍的・世界的な日本文学研究をめざしたと考えられる。『日本の文学』（筑摩書房）には、日本文学の普遍的な側面を、西欧文学との比較から導き出そうとする具体的な姿勢が見いだされる。キーンは、「日本のあらゆる詩歌の中で『万葉集』は一番西洋人を感動させるはず」と述べている。「『万葉集』に出てくるテーマ（妻や子、初恋、貧困な生活の苦しみ、いくさへ行く兵士の感情等々）は普遍的なものばかりであって、詩に興味を持っているのに『万葉集』に興味を持たないような人は想像できない」という。そこに収められた挽歌にこめられた感情は、欧米の詩句にも登場するという。また、日本の詩の特質を「多くの彫像を一つのものに圧縮する」という日本語の特徴に求め、「常に言葉の余韻というものに対して敏感」「暗示することを初めから狙うことの効用に関心を示してきた」とし、それを一九三〇年代の英米の「影像派」の文学運動に比肩している。小説や劇に関しては、「細部の新鮮な描写で生き生きと暗示する能力は日本の文学に特有のものであるのに対して、一つの作品を構成する能力はこれに劣っているといわなければならない」ものの、しばしばヨーロッパの「印象派の絵画[9]」を思わせるというのである。

こうしたキーンの日本文学作品に対する評価の仕方は、一面において、戦前・戦中の日本国内での国粋的な国文学研究

の言説と一致するところも多い。たとえば、日本文学が「余韻」を重んずる傾向があるとする論は、久松潜一によってさかんに主張されていた。久松は、一九三八年に文部省教学局から「国体の本義　解説叢書」の一冊として刊行した『わが風土・国民性と文学』のなかで、日本文学の特質を「豊富な内容を出来るだけ尠い言葉で表現しようとする傾向がある」としていた。「大きな精神内容を小さい形で表現しようとする」「象徴的表現」が日本文学の特質だというのである。また、小説にかんしても、「雄大な構想を主とする長編小説が尠く、短篇もしくは短篇小説の集合の形式を取る場合が多い」[10]と主張していた。とはいえ、そうした久松潜一の論が、日本の国体の優越を説く戦時体制の国策にそうかたちで、西欧文学に対しての日本文学に独特な「まこと」の精神性の優越性を主張するためのものだったのに対し、キーンの論は、西欧文学にも日本文学のそうした側面と共通するところがあるという論を展開したところに特徴があった。のちにキーンは、「一般の国文学者が書いた論文を読んでいると、実にしばしば「これこそ日本独特の表現である」「いかにも日本的な表現だ」といった批評に出くわす。だが、それを書いた人が、実は十分に外国文学を知っていない場合が多い」[11]と批判したのである。

戦後のキーンの日本文学研究は、戦時中の国粋主義的な国文学論に対しての批判の側面を持っていた。だが、こうした比較文学的な世界的視野を導入しつつも、戦後の日本人による世界文学言説の多くがそうであったように、キーンもまた、日本および日本文学の民族的・国民国家的な自己同一性を乗り越えようとしていたわけではなかった。暗示的で構成力に欠けるという、戦時中の国文学論とかなり共通した日本文学の民族表象を前提とした上で、似たような表現が西欧にもあるということを、戦後的な国際協調の枠内で言っていたのである。むしろ、彼による西欧文学との共通性の指摘は、日本文学の特徴の世界的・普遍的な価値を証明することによって、日本人のナショナリスティックな自負心をアメリカ合衆国から保証する機能をはたすものだったといえる。

さきにも述べたように、戦後日本における国文学の批評や研究は、多分に抽象的な世界性・普遍性の思想と、それと裏腹になった民族および国民国家の枠組の二項対立を前提として出発し、以後も展開していくことになった。世界文学をめぐる戦後の言説は、たしかに、戦時期の日本の「偏狭」で前近代的な国家主義を超えようとして、よりリベラルで近代的、国際的な視野にもとづく新しい文学や思想、学問を目指すものだった。しかし、反面において、戦時中のナショナリズムをたんなる前近代的な自民族中心主義の狭い範疇に押し込めスケープゴートにしてしまう機能をもっている。結果、戦時期の動員体制を生み出した根元的な枠組としての近代国民国家それ自体の政治性が隠蔽されてしまう。戦時期の日本の軍

国主義とは、実際には、けっして前近代の国学的なエスノセントリズムと鎖国主義のみで成り立っていたものではなかった。それは、あくまでも資本主義の近代世界システムに組み込まれたうえでそのなかでの国際的な覇権を争う、近代国民国家の一形態として形成されたものだったからである。戦後の世界文学論は、そうした側面を忘却して成り立っている。ドナルド・キーンは、こうした戦後の普遍主義と裏腹になった日本のナショナリズムを背景として、日本の言説空間の中で一定の位置を占めることになったといえる。キーンら戦後の欧米の日本文学研究者による日本文学の特殊性と普遍性をめぐる議論は、日本文学の民族的・国民国家的な枠組とナショナリズムを、戦後の政治文脈のなかでアメリカ合衆国の側から補完する役割を担う側面を強くもっていた。戦前の大東亜共栄圏や近代の超克的な政治文脈からの国文学論にかわり、冷戦体制の国際的枠組のもとで、日米双方の合作によって、国文学研究の民主化と日本文学の国民国家的な枠組の強化がなされることになったのである。

三　日米関係の政治性と日本文学論

ドナルド・キーンの文学論の特徴として、日本国内で沸騰した左翼的な政治思想に対して背を向ける態度もまた指摘できる。戦時中の軍国主義の思想ばかりでなく、左翼的な政治主張に対する冷淡さもまた、彼の日本文学論を大きく規定していた。

キーンの左翼嫌いを象徴するものとして、一九五四年に岩波新書から刊行された西郷信綱・永積安明・広末保の共著『日本文学の古典』に対する辛辣な書評をあげることができる。『日本文学の古典』は、一九五〇年の講和問題を背景としておこった国民文学論の流れで、民衆主義と階級闘争の史観から日本の古典文学史を解釈したものだった。たとえば、古代を担当した西郷信綱は、『古事記』のスサノオやヤマトタケルの話には、民衆の力を体現した英雄的個性がみられると主張していた。歴史学者の石母田正らが唱えていた論をうけた主張であるが、戦前・戦中の天皇制のもとの「超国家主義」と戦後の「アメリカ帝国主義」の双方に対する反発から、より民主的な民族主義を盛り上げようとする政治的意図が、この文学史叙述にはこめられていたといえる。

しかしキーンは、文学史のそうした左翼的な政治意図を嫌っていた。政治的な裁断は、文学作品の価値を歪めてしまう

という。例えば、『日本文学の古典』が、『古事記』の大国主を中心とした歌謡には「専制政治に抗する民衆的伝統」がこめられていると主張するのに対し、キーンは「それは現代の意味の「抵抗」とは考へられないし、当時の社会には民衆政治を立てる意志は勿論なかつた。文学論として西郷氏の文は興味のないものでもないが、独断的意見はおびただしい」と批判していた。ほかにも、清少納言や近松、芭蕉などの作品を「民衆的」「非民衆的」という価値基準で評価・裁断することの恣意性を指摘した。

政治的な裁断によって文学的価値を歪めてしまう点において、左翼的な文学論は、軍国主義の国文学論と同様のものに、キーンには思われたのである。この考え方は、それ自体としては極めて真っ当といえるだろう。だが問題は、こうした状況を背景として、キーンが、左右の政治性を相対的に脱色させた多分に美学的な観点から、西欧や中国文学との比較をとおして、日本文学の民族的・国民国家的な特性を描き出していくことになった点である。

政治性を除去して日本文学についての論を展開するうえで、キーンが最も重要視してきたのは、日記文学の問題と考えられる。もちろん、キーンの日本文学に対する関心と造詣は、漢詩文や説話、軍記物語、自然主義やプロレタリア文学にまで広く隈なく及んでおり、代表作『日本文学の歴史』では、文学史上の主要な作家や作品を過不足なく取り上げ、淡々と紹介している。有島武郎のように構築性の高い小説や安倍公房のような前衛文学も評価しており、日本文学の作品で嫌いなものは少ない、とさえ言っている。しかし、自身の日本文学観を総括的に述べる際には、彼はいつも、日記文学について言及するのが常なのである。

さきにも述べたように、第二次世界大戦中のキーンは、海軍の翻訳官として、戦場に遺された日本兵の日記を解読する仕事をしていた。そして、それと平行するかたちで、当時毎日読んでいたのは、紫式部、和泉式部、孝標女などの日記の英訳のアンソロジーだったと述べている。「三人の宮廷女性によって描かれた平安時代の優雅な出来事と、現代の醜悪な戦争とのあいだには、まさに天地の隔たりがあった」「確かに奇妙な選択ではあった。だが必ずしもそれは、間違った選択ではなかった。日記は、日本文学を通じて流れる表現の一潮流を成している。そして他のどんな文学形式にもまして、日本人の思考と感情をよく伝えてくれているからである」[12]。戦争というものに対する嫌悪感が、日記に関心をもつ大きなきっかけとなっているのである。第二次世界大戦後、多くの思想や学問が、戦争体験を原体験として世界各国で展開されることになるが、キーンの日本文学論もまた、戦争体験を大きな契機として形成された。戦争に対する嫌悪感と「敵国人」

に対するいわば人間的な共感は、非常に高く評価されるべきである。キーンが日本の読者に広く受容れられてきたのには、彼の反戦的な思想傾向が、戦後の多くの日本人の戦争に対する嫌悪感とシンクロ可能なものであったためといえよう。だがそれが、反面、政治性から切り離されたところに日記文学を見出し、その主観性を日本文学のナショナルな特性として表象することにつながっていった点を見逃すことはできない。

後年の彼の代表作『日本文学の歴史』は、文学史上の主要な作家や作品を比較的過不足なく紹介した概説的な性格が強いものだが、そこにも日記を重視する彼の立場は一貫している。その日本文学観を総論的にまとめた「序」によれば、日本文学の歴史には、「暗黒の時代」が存在せず、戦乱の時代にも詩歌が途切れることがなかったという。そして、和歌を主要詩型としつづけた保守性や貴族的性格、日本語の特性、土着の神道と伝来の仏教、儒教の思想的影響、近代以降の西洋文化の強い影響と「日本回帰」の傾向などについて語っている。そのうえで、日本では、叙事詩や長編の物語詩など西洋で重視される学問ジャンルが発達せず、かわりに日記や随筆が高い地位を占めていると指摘する。とくに日記は、その「内省的」性格ゆえに、女性が思いを自由に口にできなかった時代社会において、思いのたけを「告白」するはけ口として機能した。「平安時代の女性の日記は、何世紀隔てても変わらない人間的感情をつづっていて、現代人にも身近に感じられる」というのである。また、古典の日記文学の潮流が、近代文学において「私小説」という形式に発展することになったとも指摘している。古典から近代にまでいたる日本文学の主要な潮流の根底に、「日本人の肌に合う日記、私小説の内省的性格」[13]を見いだすのである。

そしてキーンは、別のところで、こうした内省的・主観的性格は、欧米ばかりでなく中国文学と比べても対照的な日本文学の特徴であると指摘する。「日本文学のほうは『夜半の寝覚』という平安朝の物語で、そこには行為がほとんど描かれていないのです。主人公の女性が感じたこととか、相思の相手、内大臣をどういうふうに思ったとか、それだけです」「それほど日本文学と中国文学は対照的でした。そうした主観性は日本文学のあらゆる面に出てきます」という。[14] 日記文学に対するドナルド・キーンの嗜好は、比較文学的な視線を導入しつつ、「主観性」という日本文学の民族的あるいは国民的な特徴の規定を導き出すこととなったのである。さらに、キーンの日本文学観は、日本文学の民族的な自己同一性・特殊性を説明する手段であったのと同時に、それの「普遍性」を証明する効果をもっていた。「日本文学の永続的な魅力は、古典にしても近代の作品にしても、その主観性と普遍性にあるだろう。十～十一世紀の日本文化をまったく知らない

欧米人でも、『源氏物語』『枕草子』『蜻蛉日記』『更級日記』を読んで、まったく戸惑いをおぼえない」「作者はひたすら自分の心を見つけたのだろう。そして、自分自身と周囲を観察するなかから、時間と空間を超える作品を生んだ。それは、西洋人にも、自国の文学に劣らず身近なものに感じられる」[15]と述べている。日本文学とは、決して欧米人の理解からかけ離れたものではないというわけである。

ここで注目したいのは、主観的・内省的な日本文学の民族的な特性を肯定的に描き、その普遍性までをも指摘するキーンの日本文学論が、戦後左翼の政治思想に対して一定の距離を置こうとする態度のあらわれと考えられる点である。よく知られているように、戦後まもなくの時代に影響力をもった近代主義の思想は、戦前・戦中の超国家主義をもたらしてしまった要因として、日本における近代的自我の未成熟と非社会性を指摘し、批判していたからである。日本近代文学における主観的・非社会的性格を、特殊日本的な前近代的遺制の残滓としてとらえ、批判したのである。こうした文学の非社会性に対するネガティブな表象は、国民文学論を主張する論者においても共有されていた。西郷信綱は、一九五一年の『日本古代文学史』(岩波書店)で、女性の日記や随筆が、「日本人としての感情と魂」「実生活にそくしたそういう具体的感覚、ねばっこい実証的意識」にもとづいた「魂の告白、記録」であったとして高く評価していた。しかし一方で、「けれども日記文学は何といっても自分のせまい体験だけに固執する傾向がつよく、真に客観的に時代をうつしだす鏡とはなりえなかった。真に客観的に時代をうつしだす文学は物語によってになわれた」[16]という限界を指摘していたのである。

戦後のドナルド・キーンが一貫して、西郷らが重視する古代の民族叙事詩論に否定的な立場をとり、日記や随筆の主観性を日本文学の重要な潮流として位置づけてきたことの背景には、左翼の立場からの日本文学論が潜在的にまた顕在的にもっていた反米的な政治性に対する反発があったと考えられる。左翼的な文学論が多くの場合否定的にとらえる日本文学の主観的・非政治的側面こそが、むしろ日本文学の優れた特性であり、アメリカ人にも共感するところの多い普遍性であるとするのが、彼の考え方だった。だからこそ彼は、国文学者のなかでも、西郷信綱や永積安明ら左派系の人々ではなく、より政治的に穏健な小西甚一と近しい関係にあったといえる。彼は、一九五〇年代のマッカーシズムに対して嫌悪をしめしており、米国内においてはリベラルな思想傾向に属する。鶴見俊輔と瀬戸内寂聴を相手にした近年の座談でも、ブッシュ政権の好戦的な政治姿勢に激しい嫌悪感をあらわにしているが[17]、ただし戦後の日本での反米運動に対してはある種の反発心を呼び覚まされずにおられなかったようである。キーンと同じくアメリカ合衆国の日本文学研究者として著名なE・G・

サイデンステッカーは、サンフランシスコ講和会議のさいの左翼陣営の全面講和論にたいして、「この時代、私はいつも怒っていました。いわゆる進歩派、平和主義者の主張が根拠としているところは、あまりにも現実を無視していて、そんなものを真面目に相手にする者があろうなどとはとても考えられない」[18]と回想しているが、これほどストレートではなくとも、キーンは、「現在は日本の占領を専らアメリカの利益のためであったと解釈する人は多い。有名な文化人のなかには、アメリカの進めた日本の「民主化」は全部ウソであり、アメリカの利益を促進する手段にすぎなかったと主張する人もある」[19]と不満をもらしていた。サイデンステッカーの回想からは、彼が、当時の日本の左翼運動の政治性に対する嫌悪感の埋め合わせのようにして『源氏物語』の世界に没頭していった様子がうかがわれるが[20]、そのことと、戦後のキーンが日本文学の主観的側面を重視し、かつ政治的な主義主張を廃した平明で概説的な性格の強い『日本文学の歴史』全十八巻の執筆をライフワークとしたことには、一定の共通性があったといえないだろうか。キーンの日本文学論には、アメリカ側にとって都合の悪い反米的な政治性や軍国主義の思想を除去したところで、日本文学の民族的な自己同一性を肯定的に描き出し、その芸術性に「理解」「共感」する側面があるといえよう。

もっともキーンは、「残念ながら、私が知っている限り、いわゆるプロレタリア文学には傑作が一つもない」と、プロレタリア文学に対しきわめて低い評価をあたえる一方で、「私自身はプロレタリア文学の歴史的意義を認めることはできる」[21]、と述べており、左翼的な政治性の存在意義そのものに対しては理解をしめしている。マルクス主義の思想自体は否定しないが、政治内容を重んずるあまりの芸術的な杜撰さを酷評したのである。そして、日本文学史の叙述にさいしては、左翼的な政治性を断固として拒絶した。このあたりは、左翼思想が影響力をもつ思想状況のなかで敵を作らない彼の配慮の巧みさであり、こうしたバランス感覚が彼を左右を問わず広く受け入れさせてきたといえる。とはいえ、左右の政治的なイデオロギーのいずれからも自由な、日本文学のナショナルな性格の解明という看板は、それ自体が強力な国民国家主義の政治的イデオロギーなのでないだろうか。

また、平安期の日記や随筆を私小説のはしりとしてとらえる論は、戦前から池田亀鑑や久松潜一らがすでに唱えていたものであるが[22]、戦後のキーンの言説は、アメリカの民主主義と個人主義の思想を背景としたものといえる。そしてその個人主義的な告白や内面性の普遍性・世界性とは、アメリカ合衆国に対して政治的な自立性をめざすというよりも多分に観念的なものである。キーンは、一九九〇年の『日本人の美意識』（中央公論社）でも、余韻や暗示を重んずる日本文学の

美的性格を描き出し賞賛しており、近年の『足利義政―日本美の発見』（中央公論新社、二〇〇三年）では、そうした日本的な美意識がつくりだされるうえでの足利義政の役割を高く評価している。彼によれば、日本人の美意識においては「暗示」「不均衡」「簡素」「果敢なさ」の四点が重要であり、それらは室町幕府将軍の足利義政によるところが大きいというのである。「日本史上、義政以上に日本人の美意識の形成に大きな影響を与えた人物はいないとまで結論づけたい誘惑に駆られる。これこそが義政の欠点を補う唯一の、しかし非常に重要な特徴だった。史上最悪の将軍は、すべての日本人に永遠の遺産を残した唯一最高の将軍だった」[23]。日本的な美意識の淵源を、政治的な無能力者であった将軍にもとめるキーンの姿勢は、期せずして、あたかも、国際社会のなかで政治的発言力をもたない戦後日本の有様を肯定するかのようである。キーンにとって、日本の美意識の特殊性とその世界的価値は、基本的に非政治的にとらえられるべきものだった。その意味で、キーンの日本文学論は、彼自身に直接そういう意識がどこまであるかはわからないが、戦後の日本の国際的なあり方をよく反映したものといえよう。

アメリカ合衆国の側から、日本文学の民族的な特性を肯定的に理解し共感し、その普遍性をも指摘するキーンの著作は、それゆえに、戦後日本社会において、多分に通俗的なナショナリスティックな自負心に訴え、多くの読者を獲得してきた側面がある。そしてまた、左右の直接的な政治性から背を向けていたために、彼の著作は、経済成長の営為と生活保守主義のなかでそうした政治性についていけなくなっていた日本の読者層に安心感をあたえ、人気を博すことができてきたと考えられる。

四　おわりに

以上、ドナルド・キーンの日本文学論の思想的な側面について考察した。キーンの文学論には戦後的な政治性や思想性が深く介在してきた。まず、戦前・戦中の軍国主義に対する拒否反応が、キーンの日本文学論を深く規定してきた。直接的には、戦前・戦中の国粋的・閉鎖的な国文学論への批判という形をとることになる。それは、後年の代表作『日本文学の歴史』においても、幕末の文学事情や第二次世界大戦中の国策文学に対して極めて低い評価を与える姿勢としてあらわれていると考えられる。キーンは、幕末の文学に対しては「徳川時代末期は、歌舞伎の脚本を唯一の例外として、日本文

学にとってとりわけ悲惨な時期だった。伝統的文学の可能性はあらかた探りつくされ、日本文学も（あらゆる国の文学がときにそうだったように）、存続のためには外国文学からの刺激と栄養を得る時期にさしかかっていたように見える」[24]とし、また国策文学に対しては「これら戦時中の作品のほとんどは既に忘れられ、今や文学研究家というよりは思想史家の関心の対象となっている。戦争の詩歌の最も優れたものでさえも、それを客観的に評価するのは難しいので、たとえば米英撃滅といった叫びは、たとえそれがいかに芸術的に表現されようとも、不愉快な敵意に満ちたものにならざるをえない」[25]と述べているからである。そして、そうしたいわば鎖国的な状況に風穴をあけ活性化させる役割を果たしたのが、明治維新および戦後の「国際化」だったとする図式を描くわけである。そうした立場から、彼は、日本の国文学研究の国粋的な閉鎖性を批判して、「世界文学」の立場からの日本文学研究の必要性を説いたが、それはむしろ、比較文学的な検証を通じて日本文学の民族的な枠組とアイデンティティーを、アメリカ合衆国の側から補強する機能を果たしてきたといえる。また、戦後に書かれまた影響力をもった日本文学史の多くが、左翼的な思想的枠組のもとに、近代的自我や民衆主義、国民文学の実現という政治的主張を織り込んでいたのに対し、キーンの日本文学論は、そうした政治主張を排除する性格をもっている。戦後の日米関係を危うくしかねない政治的主張を排除したうえで、日本文学の民族的な自己同一性を多分に美的な観点から描き出していたのである。

戦後の日本は、サンフランシスコ講和条約を通じて、冷戦下の国際秩序のもと、アメリカによる軍事的・政治的・文化的なヘゲモニーのもとに、その国民国家としての独立を獲得した。戦後日本の民族的あるいは国民国家的な自己同一性は、アメリカ合衆国との共同作業によって維持されてきたといえる。そうしたなか、ドナルド・キーンの日本文学論は、戦後日本のナショナリスティックな意識と開明性（アメリカニズム）、そして日本文学の国民国家的な自己同一性をアメリカ合衆国の側から保証し、かつそれの普遍性・世界性の証明書をも与える機能を果たしてきたと考えられる。マルクス主義の政治思想と一線を画し、日本文学の美的な側面を高く評価するキーンの文学論は、戦後の日本社会の思想的文脈のなかでは、どちらかといえば「保守」の側に近いポジションを占めてきたといえるだろう。それは、対米関係を重視し平和主義の建前を崩さなかった戦後日本の保守政治のあり方とも相似した立場のように思われる。アメリカ合衆国と日本の同盟・友好関係を誰よりも強く希望し、また平和主義を強く信奉しつつ日本の文化的ナショナリズムを擁護するキーンの思想は、戦後の日本の保守政治のあり方とも相似するように思われる。

注

(1) キーンの日本文学論について論じたものとしては、これまでに、しろかずと「ドナルド・キーン『芭蕉・更級紀行』論—諸外国の「日本文学研究」を探る—」(『古典遺産』一九五九年一月)、剣持武彦「ドナルド・キーン著吉田健一訳『日本の文学』」(『比較文学』一九六三年一一月)、金井円「ドナルド・キーン著、芳賀徹訳『日本人の西洋発見』」(『解釈と鑑賞』一九六九年六月)、武田勝彦「西欧の日本文学研究23 T・サッチェル氏の『東海道中膝栗毛』ドナルド・キーン氏の『日本文化論』」(『国文学』一九七一年七月)、林田実「ドナルド・キーン氏の"Japanese Literature"について—その連歌及び連句観—」(『大阪樟蔭女子大学論集』一九七二年一一月)、千葉宣一「ドナルド・キーン著『日本の作家』」(『国文学』一九七二年一一月)、平岡敏夫「ドナルド・キーン著『日本文学史近代・現代篇一』」(『日本文学』一九八四年七月)、大橋清秀「ドナルド・キーン氏のかな日記の日付についての考え方と英訳更科日記の本の事」(『帝塚山学院大学研究論集』一九八五年一二月)、野沢穣「ドナルド・キーン著 金関寿夫訳『百代の過客 日記にみる日本人』上・下」(『月刊国語教育』一九八六年八月)、田中礼「ドナルド・キーンの啄木観」(『国際啄木学会会報』一九九一年一一月)、原崎孝「奥深い理解—ドナルド・キーン(新井潤美訳)『日本文学史』近代・現代篇 七」(『現代詩手帖』一九九二年六月)、佐伯彰一「ドナルド・キーン『日本文学の歴史』全18巻の完成—「語り」の魅力」(『新潮』一九九七年七月)、山崎正和「ドナルド・キーン著(角地幸男訳)『足利義政—日本美の発見』」(『文芸春秋』二〇〇三年四月)などがある。書評がそのほとんどを占めており、キーンの文学観を歴史的に相対化して思想史的な検証の対象とした研究は、これまでなされていないと思われる。

(2) ドナルド・キーン「佐佐木信綱著『上代文学史』」(『文学』一九五三年五月)。

(3) 佐佐木信綱『上代文学史 新訂版 上』東京堂、一九四八年、130ページ。

(4) 三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』上、日本図書センター、一九八二年、25ページ。

(5) 笹沼俊暁『「国文学」の思想—その繁栄と終焉』(学術出版会、二〇〇六年)を参照。

(6) 佐藤泉『国語教科書の戦後史』勁草書房、二〇〇六年、1〜51、79〜90ページ。

(7) 津田左右吉「世界文学としてのニホン文学—文学の比較研究について—」(『文学』一九四七年一月)。

(8) 小田切秀雄「岡崎義恵「世界文芸学序論」批判」(『文学』一九四七年五月)。

(9) ドナルド・キーン『日本の文学』吉田健一訳、中公文庫、一九七九年、129〜130ページ。

(10) 久松潜一『わが風土・国民性と文学』教学局、一九三八年、34・38ページ。

(11) ドナルド・キーン『日本文学のなかへ』文芸春秋、一九七九年、159・160ページ。

(12) ドナルド・キーン『百代の過客 日記にみる日本人』金関寿夫訳、朝日新聞社、一九八四年、18ページ。

(13) ドナルド・キーン『日本文学の歴史 1』土屋政雄訳、中央公論社、一九九四年、23ページ。

(14) ドナルド・キーン『NHK人間大学 日本の面影』日本放送出版協会、一九九二年、10〜12ページ。

(15) ドナルド・キーン (13) 前掲書、56ページ。
(16) 西郷信綱『日本古代文学史』岩波書店、一九五一年、187ページ。
(17) キーンは、「私は、いまのアメリカの政権がひじょうに嫌いです。絶対に反対しています。そして、いまの大統領もひじょうに嫌いです。彼がテレビに出ると、私は目をつぶったりして、絶対に見たくないんです」と述べている（瀬戸内寂聴　ドナルド・キーン　鶴見俊輔『同時代を生きて　忘れえぬ人びと』岩波書店、二〇〇四年、230ページ）。
(18) E・サイデンステッカー『日本との50年戦争　ひと・くに・ことば』安西徹雄訳、朝日新聞社、一九九四年、12・14ページ。
(19) ドナルド・キーン『碧い目の太郎冠者』中公文庫、一九七六年、53ページ。
(20) サイデンステッカー (18) 前掲書、15ページ。
(21) ドナルド・キーン『日本文学を読む』新潮社、一九七七年、141ページ。
(22) 日本の国文学者による日記文学論の変遷については、鈴木登美「「女流日記文学」の構築―ジャンル・ジェンダー・文学史記述―」（『文学』一九九八年一〇月）を参照。
(23) ドナルド・キーン『足利義政　日本美の発見』中央公論新社、二〇〇三年、227～228ページ。
(24) ドナルド・キーン (13) 前掲書、22ページ。
(25) ドナルド・キーン『日本文学の歴史　14』角地幸男訳、中央公論社、一九九六年、107ページ。

*本稿は、日本文学協会第26回研究発表大会（二〇〇六年七月一六日、於東北大学）での口頭発表をもとにしたものである。